

鳥羽・伏見で幕府軍が敗走

慌てて官軍へ贈り物し「本領安堵」に

最後の代官

③

忠左衛門日記

明治元年(1868)の正月、岩本忠左衛門は庄屋たちと年始のあいさつ

1月3日に旧幕府軍と新



如是寺の裏山にある神田省三の墓。佐賀県出身で蘭学ができた神田は砲術師として衛久に召し抱えられるが、鳥羽・伏見の戦いで腰のあたりに鉄砲傷を受け数日後に死亡した(十倉志茂町で)

政府軍による「戊辰戦争」が勃発。情報伝達の手段がなく数日後にそのことを知った忠左衛門の生活は一変、戦後処理に大慌てすることになる。

忠左衛門が戊辰戦争を知ったのは開戦から6日後の1月9日。京都にいた家来から、7日の鳥羽・伏見の戦いで谷衛久がいる幕府軍が敗れ、勝利した官軍が丹波地方へも制圧にやって来るかもしれないと聞かされた。

10日には衛久の家臣神田省三が鳥羽・伏見の戦いで負傷し、家来が神田を釣台に乗せて

帰ろうと苦勞していることを知り、忠左衛門は11日に家来3人を派遣。神田を十倉へ連れ帰った。しかし、旧幕府軍の神田をかくまっていることを官軍に知られてはならないと、忠左衛門は家来の家に神田を預けるが、神田は14日に死亡。15日に十倉志茂町の如是寺の裏山に埋葬した。

17日には、福知山に宿泊中の官軍の所へ周辺の代官たちがあいさつに行っていると聞かされた。忠左衛門は本家の山家藩と相談して従来の制札は降ろし、官軍の言う通りにすることを決める。

一方、衛久は大阪から和歌山、三重へ渡り、船で江戸に帰る。忠左衛門が衛久の無事を知ったのは鳥羽・伏見の戦いから

およそ1カ月後だった。忠左衛門はその後、延べ1カ月間にわたって京都に滞在。衛久を京都へ呼び寄せ、つてを頼って知り合った新政府の権力者・有栖川宮家に再三の贈り物をし、ようやく5

月1日、「本領安堵」の朱印状を得たのだった。